

3 内痔核に対する ICG 併用半導体レーザー治療の経験

島村 公年・島村 栄員

しまむらクリニック

インドシアニンググリーン (ICG) を内痔核に注入し、低出力の半導体レーザーで凝固する新しい非観血的治療法を 16 例に施行した。ICG は半導体レーザー光の吸収を増強し、かつ深部への進行を遮断する。対象は脱出または出血が主訴の 2 度ないし 3 度の内痔核で、手術は原則として腰椎麻酔で行った。照射部位は 2.8 カ所 (以下平均)、手術時間 18.8 分、入院期間 3.1 日、術後経過期間は 11.6 ヶ月であった。術後の疼痛は軽度で多くは自制内であった。出血は少量で無処置あるいはビスマス系座薬で止血した。脱出は半数例が術直後に、残りは 1～2 ヶ月かけ徐々に消失し、1 例のみ残存した。再脱出はなかった。本治療に対し、11 例が満足、4 例がまあまあ満足、1 例が不満と評価した。

4 ICG 併用半導体レーザー療法を用いた痔核の day surgery

杉本不二雄

杉本医院 (消化器科, 外科, 内科, 肛門科)

ICG 併用半導体レーザー療法は 805nm の単一波長半導体レーザーと 805nm が最大吸収波長である ICG を併用し、内痔核を切除せず縮小させる方法である。2002 年 4 月から 2003 年 11 月の 1 年 8 ヶ月間に、64 例の痔核手術を day surgery で行い、内 62 例に半導体レーザーを使用した。

内訳は、レーザー単独が 20 例、レーザーと結紮切除術 (LE) が 25 例、レーザーと痔核、裂肛手術が 14 例であった。レーザー単独例では LE との併用例に比して、術後疼痛、職場復帰、創治癒期間において優れていた。レーザー療法の合併症は、後出血が 1 例、外痔核の遷延性浮腫が 1 例であった。

本療法は、痔核の程度に応じてレーザー単独または、LE とレーザーの併用で使用することで、LE の数を減らし、術後疼痛の軽減、出血リスク低

下を期待できる点で有用である。

5 当科における痔核・脱肛に対する PPH 症例について

酒井 靖夫・番場 竹生・本間 英之

武者 信行・坪野 俊広・相場 哲朗

川口 正樹

済生会新潟第二病院外科

当科では PPH を 2000 年 8 月から導入し、20 例に行った。男：女 = 15 : 5、年齢 27～79 歳である。内訳は内痔核・脱肛 18、ホワイトヘッド肛門 1、不完全直腸脱 1 で、Golig her 分類ではⅡ度 1、Ⅲ度 6、Ⅳ度 13 例であった。13 例に外痔核やスキントグ、肛門ポリープなどの併存病変を認めた。術式は PPH 単独 13、PPH + 付加手術 7 で、併存病変に L&E ポリープなどを必要に応じて付加し、痔動脈結紮を 9 例に行った。術後合併症は後出血 1、有痛性外痔核 2、晩期部分粘膜脱再発 1、麻痺性イレウス 1 であった。術入院期間は平均 7.6 日で、PPH のみでは多くは 5 日以内に退院できたが、付加手術すると通常手術と同様であった。再発は 1 例 (5%) で L&E し、縫合部狭窄例はなく、全例脱肛は消失し、痔核の縮小が得られた。

【まとめ】 PPH は痔核の発生機序に則った合理的な術式であり、術後疼痛は従来法より軽微であり、入院期間も短くでき、患者の満足度は高い。

6 当科における PPH の現況

岩谷 昭・松尾 仁之・小林 孝

新潟臨港総合病院外科

PPH と結紮切除 (LE) とを比較検討した。2001 年 1 月より 2003 年 10 月の間で、Ⅲ度以上の痔核手術症例 266 例を対象とした。PPH 154 例、LE 112 例、手術時間は平均で PPH 27 分、LE 39 分と有意に PPH が短かった。鎮痛薬投与期間は有意に PPH が短かった。入院日数は平均で PPH 5 日、LE 12 日と有意に PPH が短かった。退院後疼痛を訴えたものは PPH 7%、LE 18% で有意に PPH が少なかった。術後出血、狭窄に有意差はな